

* 燃やし方

- ① 1週間前から、野焼きするススキの場所の雪を、ブルドーザーを使って除雪する。ススキをしっかり乾燥させるため。
- ② 除雪した雪は、防火帯の役目をする。
野焼きの手順は、
- ③ 点火棒で、一列に火をつけていく。
- ④ 燃えやすいように、レーキでススキを起こしていく。
- ⑤ 順次、点火していく。
- ⑥ 燃え残った所は、ガスバーナーで点火していく。
- ⑦ 水を背負った人が、回りに立つ。
- ⑧ 杉の生葉をつけた枝を持って、火を押しつけて消す場合もある。

◎野焼きの様子、大人の様子

*今回は、回りにたくさんの雪が防火帯の役目をしていましたので、安心して野焼きをすることができました。

*地表近くのススキはよく乾いていないため、表面だけの燃え方になってしまいました。

*回りから火が入ったときは、中央で上昇気流が発生し、小さな火柱が立ちました。雨乞いの中には「火を焚く」という話を何度も聞きましたが、この様子を見て、「なるほど!」と思いました。民宿のすぐ後ろにある「雨呼山」では、このような火柱が立ったのでしょうか。

*岡田様が、野点をしてお茶をふるまってくれました。こんな時に飲む味は、緊張感がほぐれ、格別でした。また、春の使者であるフキノトウの天ぷらをごちそうしてくれました。少し苦味が広がると、身がひきしまるようでした。そういえば、冬眠から覚めた熊は、最初にフキノトウを食べ、空腹の胃に刺激を与えるのだということを、本で読んだ記憶があります。

◎子どもの様子

*野焼きに、あまり関心はありませんでした。

*たくさんの雪、どこでも歩ける雪、その雪に関心がむいてしまいました。ハンドル付のそりに2人が乗り、「キヤー」「ヤッホー」と叫びながら春の雪を楽しんでいました。

*私も尻滑りに挑戦してみました。傾斜が強くても、スピードは、3月の雪に比べると、あまり出ないことがわかりました。

*雪が硬く、「どこでも道」になる春の雪は、また夢を広げてくれました。

◎交流会

夕食後は、恒例の交流会です。

今回は、子どもの参加はわずかに4人なため、ゲームをして親子で楽しむことにしました。まずは、風船ゲームです。大人3人と子ども3人で、バレーのようなゲームをしました。力いっぱい打っても、風船はどこえ行くかわかりません。その偶然性がおもしろくて、汗をかきながら続けました。

始めは手を使っていたのですが、そのうち頭や足までで打ち返していました。大樹君、寛ちゃん、ひろくんは大活躍でした。

熱くなった身体を冷やしに、里地の夜に出ました。星の観察です。たくさんの星が光っていました。

春日さんの説明で、北斗七星と北極星を確認しました。西の方には、明るいく大きな星が輝いていました。「人工衛星が、よく見えるよ」と女将さんが教えてくれましたが、それらしきものを確認できませんでした。流れ星にも出会えませんでした。残念！

風の音だけがわずかに聞こえる真っ暗な空を見上げていると、自分の存在を忘れて、星たちが生き生きと輝いていることに気づき、なんとなく魅力を感じてしまいます。だから、一度は暗い空を見上げたくなるのでしょう。

4月26(日)

◎ 朝の散歩

6:00~7:30まで、里地を散歩しました。古民家から雨呼山のルート(大六天コース)を調べてみました。登山口には残雪があり、フキノトウがたくさん姿を現していました。その先を進んで行くと、枯れ葉・落枝で被われていて、はっきりとした道はわかりませんでした。ようやくルートを見つけましたが、今日のみんなとの行動には向いていないことがわかりました。途中、2頭の大きなカモシカに出会いました。こちらをじっと見ている姿は落ち着いたものです。鹿に比べると、愛らしい顔です。毛の色は、杉林の中ではとてもわかりづらい灰茶色をしていました。もう春だからでしょうか。

9:00~

寺山峠から、雨呼山(911^m)に登りました。日だまりの中、ミズナラの落ち葉を踏みしめながら登りました。

マンサクやサンシュユの黄色い花がさいていました。ピンク色のショウジョウバカマも、頂上付近で咲いていました。

頂上からの眺めは最高です。宿泊した関ヶ原の茶色い屋根、スキー場の上には武尊山がお椀のような姿を現していました。南に視線を動かすと、師入の集落がありその左には藤原湖、そして藤原湖の上には銀色に光る2本の導水管がはっきりと見えます。この導水管は玉原湖とつながり、揚水発電の役目をしているとのことでした。

山々に囲まれながら、わずかな平地にひっそりとたたずむ家屋を見ていると、「静かさ」「太陽の恵み」「ゆっくり」「自然と共に」「大自然の中で生かされている人々」という思いが浮かんできました。

都会の動きと比べると、それらは「停滞」「活気がない」「生産性が低い」「生活できない」「なにもない」「山菜しかない」となるのでしょうか。

が、この静かな藤原集落は、4つのダムを要し首都圏へ水と電気を供給しているのです。たくさんの木々に囲まれた山々と人々の手で耕された土地からは、山菜・野菜・米・魚などの食料を生産しています。静かな森の散策は、心身の疲れを癒してくれる空間です。さらに、ダム・森・耕作の多様な環境は、熊・鹿・カモシカを始め昆虫・溪流の魚・野草などの多様な生き物を育

てているのも事実なのです。

それらを総合的に考えると、「人の命」より、「経済」を最優先する現在の世の中の動きに疑問をもたざるをえません。

「お金」の前に「人の命」であり「食料」「きれいな水」「汚れていない空気」があるのではないのでしょうか。

「お金」は、それらの後に、人と人との動きをスムーズにする一つの手段でしかありません。

太陽をいっぱい浴びる藤原の村こそ、人々が求めるこれからの未来の姿であり、「人の命」を一番大切にしたい考えのもとにすべての活動をすすめていく場であるように思いました。

「限界集落」と言われる藤原の村に、再び「光」の当てられることを願って止みません。

◎ 古民家のこと

のらえもんが宿泊したときに使う食器・鍋・ボールなどを運び込みました。囲炉裏・ストーブは、すでに運んであります。

2Fの一部を部屋に、炊事場を土間に、と、アイデアを持って北山さんと山口さんが話をしました。が、北山さんの意図するところと合わないようです。今後どうするか、もう少し、時間がかかりそうです。

◎ 子どもたちは、残雪の上で穴を掘ったりくずしたり、跳び越えたり、雪の塊をぶついたり、と、雪でいっぱい遊んだ2日間でした。

会計報告

現地集合のため
宿泊費のみの費用になりました。

参加費（宿泊費） 合計 68,000円

内 訳	大 人	6500 × 6
	中学生	6500 × 2
	小学生	5500 × 2
	昼 食	500 × 10